

靈魂は存在するか

死後の世界などない。死んだら何も残らない。こう考えるのが自然である。靈魂が残るとしたら今まで死んだ何千億人の魂がフワフワそこらに浮かんでいられることになる。だがそれにしても科学的でも合理的でもない不思議な現象がよく起きる。偶然だとは言いきれない「超常現象」が。

怪宮管理講座 290 染谷和巳

やらずの雨は死者の靈の惜別

九十二歳でなくなった叔父の一周忌に千葉県の八柱靈園に行つた。家族の他に私たち甥や姪など二十人たらずの集まりだった。

小雨が降っていた。墓の前に御焼香の台をすえ、坊さんの誂経が始まった。雨粒が大きく降り本降りになった。若者が坊さんに傘をさしかけた。足元もぬかるみになり靴が汚れた。墓石の後に卒塔婆を立て掛け、一人ひとりが傘を置いて焼香した。

式が終りみな「やれやれ」と言いつつながら車に戻り、会食の場に向かった。雨は小降りになり、会場に着く頃にやんだ。

叔父は私の父の弟で九人兄弟の最後の一人だった。一族をよくまとめた。田舎の本家の甥っ子が親類の法事に出ないと言つと「世話になつておきながらそれが人の道か、何をおいても出る」と大きな声で叱つた。本家の寺に大金を出して鐘樓を寄進した。先祖や親族を大事にする人だった。

生前親しかった人々が久しぶりで自分のために集まつてくれた。嬉しくて涙があふれ、とまらない。どしゃ降りの雨は叔父が流した嬉し涙ではなかったか。

この雨に似た、雨の体験を思い出した。U社の北山社主がなくなつて二

でも、こんなことが本当にあるんですね。車内の会話である。やらずの雨。帰ろうとする人をひきとめるかのように降ってくる雨、である。

芸者雛菊が「月様、雨が…」と言外に「帰らないでずっと一緒に居てください」という意を込めて言うが、月形半平太は「春雨じゃ、濡れてまいろう」と帰つてしまふ。芝居の名場面であるが、これがやらずの雨の本来の意味であろう。

「さきほど坊さんがお経を読み出したら、雨が強くなつて大変でした。みんなが集まつてくれたので叔父さんが嬉し涙を流したのだと思います。やらずの雨です。今はやんでいます。みなさんがばらばらに帰る時、きつとまた、

出したら、雨が強くなくて大変でした。みんなが集まつてくれたので叔父さんが嬉し涙を流したのだと思います。やらずの雨です。今はやんでいます。みなさんがばらばらに帰る時、きつとまた、

義興は陪臣の勤めでわずか十三騎を従えてひそかに鎌倉に向かつて出立した。

多摩川の矢口の渡しから船に乗った。川幅四町(四〇〇メートル)、底は深く波が激しい。船底には二カ所穴が開けられノミで栓がしてある。敵に内通する陪臣江戸遠江守たちの策謀である。対岸には三百騎が義興一行を討つために伏せており、後手にも百五十人を配し

新田義興が犯人を呪い殺す話

東急多摩川線武蔵新田駅(東京都大田区矢口)の近くに新田神社がある。新田義貞を祭る神社ではなくその次男義興の神社である。義興は陪臣の勤めでわずか十三騎を従えてひそかに鎌倉に向かつて出立した。

多摩川の矢口の渡しから船に乗った。川幅四町(四〇〇メートル)、底は深く波が激しい。船底には二カ所穴が開けられノミで栓がしてある。敵に内通する陪臣江戸遠江守たちの策謀である。対岸には三百騎が義興一行を討つために伏せており、後手にも百五十人を配し

川の中程にさしかかると一天にわかにかき曇り、雷が鳴り、暴風

私たちの精神を支える死者の靈

日本は戦争に負けて何も無い焼け野原になったが、国のために散華した靖国神社の英靈が復興のバックアップをした。私たちは祖先の御魂にすがった。どうかお守りください、幸福にしてくださいと伏し拝んだ。

先祖の靈が日本の経済復興に力を貸し、日本人の精神の再起をうながした。戦後生き残った人々は憑き物に憑かれたように、靈に背中を押されて上昇の坂道を歩いてきた。

死者の靈は身近な個人に憑いて、助けたり脅したり改心させた

荒波たけくるい、船は転覆、船頭と舵取り、水手ともども船底に沈んだ。これを見ていた江戸たちは「義興の怨靈の仕業」とおびえて逃げた。嵐と雷はやまず、山の麓で江戸は手を合わせて「お助けせうらえ」と天を拝んだが、義興の怨靈は刃渡り七寸の雁俣で江戸を射通した(このように見えた)。悶絶した江戸を従者が館に連れ帰ったが、その後七日間、アツプアツプと水に溺れるまねをして「助けよ、助けよ」と叫び続けて狂死した。鎌倉の主将島山國清は、夜毎、義興が鬼となつて攻めよせる夢にうなされた。そしてその夢は二帯三百余家、神社仏閣十数箇所を焼きつくす大火となつて現実のものとなり、島山は病に伏した。

その後も矢口の渡しの近辺には異様な光や妖怪の類が頻繁に出没して人々を恐怖のどん底に陥れた。義興の靈を鎮めなければこの不吉はなくなるなら、義興の家臣や近隣の住人が相談して、矢口の渡しに近く新田神社を建立し、みなみな「どうか鎮まりたまえ」と参拝した。

正平十三年(一二五八)、今から六五五年前のことである。それから毎年、義興の命日十月十日には氏子が集まり鎮魂の儀式が行われている。

私の先祖は義興の家臣であった。一緒に死んだ十三人には入っていない。神社を建てたほうの家臣である。姓は中里。中里家は戦国時代は関東の武将であり、江戸時代は武蔵守を名乗る小祿の大名であり、明治以降は地元の名主や組頭を務めた。

租先は六百余年氏子として神社を守り運営する役についていた。私は末裔の中里弘二氏に会い、新田神社の氏子の集いに三千円の会費を払って参加して、以上の新田義興の話聞いた。

謀略にはめられて憤死した武将が、悪霊となつて復讐し、その後人々を恐怖に陥れるという話は、「太平記」にあるもので、歴史的信憑性はうすい。

神社の多くは英雄偉人を神として、讃えるために建てられるが、菅原道真の怨念を鎮めるために太宰府の天満宮が造られた例のように、新田神社のような神社も数多くあるのである。

死者の怒りや怨念が、天変地異や異様な光体となつて生きている人々に働きかけるという現象。これを信じる人がいるし、笑つて信じない人もいるのが面白い。